





かましく云つて居ります。然し前申した通り此問題は口や筆でやかましく云つた所が仕方がない何んでも農林業をなさなければなりません。農業者は田畑により大なる収入を上げ、林業者は山により大なる収入を上げねばなりません。次で日本の富を作らなければなりません。日本を助けねばなりません。又世間の浮華に流るゝ時にあたり諸君は此の所にて一生懸命に踏み止まつて此風潮を此處にて止めねばなりません。以て此風潮を締め直ねばなりません。諸君の任務は重且つ大であります。諸君は此重大なる任務を自覺して勉めて以て世間の風潮をして此實業家を貴びしむる様になければなりません。今日吾々農林業に従事する人が世の中から土百姓の樵夫のと云われても無理ならぬことでありませぬ。何んとなれば今の農業者は其の大部分は頼み甲斐のない社會の悪風潮に逆ふことの出來ない腰抜けばかりであるからであります。故に諸君は互に氣を一致して國の爲め努力して國家の富を作らんことを希望します。

願わくは木曾の如き好き土地に學ぶ諸君は他の人の考へつかぬ所に氣を付けて此の世の中の思想界を一新して以て諸君が此思想界を支配せられんことを希望致します。

(文責在記者塚田齋藤速記)

通信

青森 由尾忠助

標題の通り各方面から觀察した青森市を照介しよう本州の最北端に位置する此地は本都を去る二百里昔ならば脚絆草鞋の廿日道中と云ふて随分容易ならぬ道程なれしが今

は所謂文明の餘澤を蒙り鐵路に身を委ぬる事僅々一晝夜にして安樂に到着する事が出来る。鐵路に次の三線が有る一は即ち東北本線と稱し上野を發し野州岩代の平野を走り更に北上川に沿ひて仙臺盛岡を経て青森に至る。一名東北中央線の稱あるもの二は即ち海岸線と稱し常總の沿岸を過ぎ仙臺にて前線に合するもの三は東北本線岩代福嶋市より分岐し兩羽の間を過ぎて秋田弘前を経て青森に通ずるもの奥羽線はなり而して沿道の風色奥羽線及び海岸線に在りては局部的海岸に接するを以て白砂青松の間より眞帆片帆の送迎あり旅情を慰むるものもある。東北本線に至りては單調なる平野の連續にして時に松林の傍に茅屋の點綴するありて單調を破る清涼たるのみ今旅客の最も幅濶する東北本線に依りて旅行したりとせん。其以北は恰も北海道に彷彿たらしむ四月の初旬にも未だ山野に殘雪斑斑在り東北に多き樺が枯葉を枝に付けながら北風に揺られ居る邊りの光景は寂漠と荒涼の極致なり而して乗降の客の言語も次第に不分明となり且つ連日連夜の乗車の疲勞と倦怠も併發に依り急に遠い國へ來た事を自覺する而して此邊の驛名には沼宮内(ぬまみやない)一戸(いこのへ)小島谷(こじまや)古間木(ふるまぎ)尻内(しりうち)淺虫(あさむし)等稍アイヌ的の臭味を帯んだ省稱が多い青森から十二里の手前彼の大湊港部への分岐点たる野邊地に到り陸奥灣の沿岸となる是より青森迄の間は陸奥灣唯一の景勝地にして寄せて返す白波の岩に當りて玉と碎ける様或は渚に並ぶ青松の間より直帆片帆の波に隠顯する風情など過ぎ来し沿道の單調に引き變

へて確に一服の清涼劑である斯る内に前日の午後十時に上野驛を發車した列車は翌日の黄昏午後五時頃に青森へ到着する。青森市は陸奥灣の西南に海岸に沿ひて稍灣形に並んだ細長の市街にて六本の縦街と是に交叉する約十本の横街とに依つて稍盤目に近い區劃をされて居る市の西北端に青森驛が控へて居る。青森市は北海道十ヶ國の連結驛に於ては建築も宏壯にて構内の規模も中々大きい構内面積が約貳万坪是に敷設されたレールの延長哩数が十七哩余以て其一列車から降りると長約五十間セント造りの東北奥羽兩線のプラトホームが相對して並んで居つて夜でもあると電燈の火光が一直線をなして甚だ美しいプラトホームから東北線御定りの陸橋を渡つて開札口一降段すると右は青森驛の建築物にて總ての驛務を取り扱ひ左は北海道連絡線の待合所。青森市の中島旅舎が出張して總ての飲食物を供給して居る時間のない時は直ぐ前み次第のミールが出来来る。安くて便利で大へん評判がよい。若し何か旅行のことに就ては不分明の事有れば開札口の直ぐに左腕に旅客案内と云ふ徽章を付けた驛員が居つて何んでも親切に應答してくれる。便利な設備も先づ停車場前の新町通りと眞直に行く事約五丁横街に突當る右方を顧みれば忽ち三四の大建築物が目に入る。是れ即ち青森縣警察署及東津輕郡役所東奥陸奥の兩新聞社に於て大火後綠蔭皆無の青森市に一人老松右柏の景を填にして周圍に比較物がない丈けに一層壯嚴の觀を呈して居る事を進めて行く

事暫し再び横街と交り左折して横街を進めば左方に市内に唯一の縣社善知嶋神社がある。謡曲に迄詠はれて古い古蹟のある神社にして境内廣潤に且つ市の中央に位置し景勝の地を占めて居たれ共四十三年の大火の際社殿神木共に烏有に歸して今は名ばかりの仮社殿に昔の偉を偲はしめる市街は海港物丈けに建築物も其他の設備も東北の市街中では善良の部であつたが大火後早々に建て未だ本建築ならぬ仮建物多く現時は手取早いマツチ箱的の洋折衷の建物が大部を占めて居る更に進んで第三の縦街を過ぎ第二の縦街濱町通りへ出ると茲に青森郵便局あり燒殘の煉瓦造りを巧に按配して今は白色のペンキ塗りとして電燈の反射が美しい光彩を放つて居る郵便局の裏と縣廳通りの海濱に各一個の棧橋あり長二四十四間なれども遠淺の海には規模除り少にして船舶の横付けなどは夢想にも及ばない。共是が青森名勝の一にて夏の夕に於ける市民唯一の納涼物にして又偶の慰みに釣糸を下げるには屈竟の物品にして本務多き交通機關以前に市民に多大の慰安を興へて居る青森は未だ新開地の域を脱せず必要に迫られたる物質上の設備は年と共に完成の域に近づきつゝあれ共一方市民に慰安を興ふとか云ふ方面の施設は地勢上及市成立の性質上中々近い將來には解釋の付かない問題にして是を昔時王侯が居を構へし所謂城下たりし地に比すれば景勝地の少なき事到底今日の論にあらざる當地に於ては春の旦夏の夕郊外の散策と云へば後章に陳べる合浦公園の外には唯一の此棧橋あるのみ而して彼の天下三大美林の一として名譽斯界に噴々たる羅漢柏林を抱養する津輕半島は海波を隔ち左方指順の間に相呼應し又維新當時舊

會津藩の封土たりし斗南半島は右願煙波に霞んで宛然一抹の淡墨に似たり中央は平飯海峽を隔て北海道に對して居る灣内廣闊にして毎夏八月の候帝國海軍の精銳幾十の艦艦を收容して艦砲射撃の壯觀を呈せしむる故を以て未だ函館小樽の如き盛況を現せざれども灣内に常に十數の氣船跡を絶たず黒煙天に沖し殊に近來對露貿易の開始に連れて益發展の氣運あり有業は我北門の鎮鎮たるを首肯せしむ宜なるかな近來有識者間に筑港の必要を喧傳せらるゝ事頻々たり或は近き將來に於て外観内容共に整備せしむる北門の鎮鎮としての青森港を實現するやも計られず前途誠に洋々たりと云ふべし

棧橋の景に倦きたる吾人は再び車上の人となつて第三の縦街市内第一の繁華地大町通りへ出づ。是れ即ち青森目貫の街區にして各商賈軒を連ね股販他街を壓す都大路に見るが如き車馬縱橫するが如き盛觀なしと雖も有業は海港上の面目を持し市内何となく活氣を呈し且つ金隔機關たる銀行の多くは塲所柄として此地に營業しつゝあり大火前に海岸の環沿に枝振揃ひたる松並木に揚柳を混植しありしを以て春宵淡霞に隔てられたる月光を浴びながら此街區を逍遙する時は眞に春夜の更けるをも知らざりき此通りを東に進めば雪中行軍に名高き八甲田山は源を發する堤川に出で橋上に立つて東南を眺むれば五月下旬尙雪を頂く八甲田山は泰然として雄姿を横たへ復た當年の慘狀を想起せしむ更に行く事約半里にして此地唯一の遊園たる合浦公園に到る自然に備はりたる白砂青松裡に更に幾多の人工を加へ池を穿ち山を築き老松の下にベンチを置け眺望自由なる丘上には亭の設へもあり四時濤聲

松籟相和して風光絶佳吾人は遠路を厭はず屢此園を訪づれて勞れたる身心を大自然の懷に抱かれて限りなき慰安を得るを唯一の樂みとなせり殊には山紫水明の候海には靜波白沫を浮めて悠々たるの時流に無邪氣なる海士の子三四打ち連れて網引く真似嬉々として戯れる風情なぞ誠に一幅の名畫なるべし唯位置の市外餘りに遠隔の地にあるため多忙なる市民の春願を蒙る事割合に少なしとするも景勝に少なき青森としては先づ第一に指を屈するに躊躇せざるべし今にして思へば五年の昔同期生八人と霞に暮るゝ初春の夕べ希望多き前途の光明を話らひし當時の追想浪々として湧き來り吾人は低徊容易に去るに忍びざる也此地を去られし兄弟等の消息や如何に暇あらず近況を語らひて此流人の小憂を慰め給はずや

さて公園を見れば再び先の縦街を過ぎ市の西北市外沖飯を訪ひ津輕林政の首腦地たる青森大林區署に到らん地は舊松前街道に接し停車場を西北に去る十町沖飯田圃の中央に巍然たる高樓を築く構内約三千坪階上階下二十有三の室を有し容るゝ處の署員約二百人余本邦林政を掌る官署として恐らく此右に出づるものなからん而して管内廿一小林區に分れたれ共管内面積林野合計九千萬町余吾人の屬する施設按は技師一人技手廿九人を有し階上の大會議室に占據外ケ濱の碧水と八甲田山津輕富士の崇高を俯仰しつゝ當署植伐の諸計を豫定する署の東隣に所屬青森製材所あり津輕半島及其他各事業區より供給する資材の製材を掌り去る卅九年運轉を開始してより爾來六星霜年々約九万尺の製材を造成す動力は蒸氣電氣の二力に依り縦鋸四臺帶鋸二臺丸鋸十二臺を据へ晝夜兼行盛んに經營されつゝあり青森は

於ける唯一の大工場にして其定刻を報ずる  
 氣笛の音は一度青森の地を踏みし外來の人  
 すらも容易に忘る能はざる物の一ならん  
 製材所に隣りて附屬青森貯材場あり、植  
 水の貯木池あり而して是池に貯蔵さるる資  
 材は所屬森林鐵道に依り搬送され延長線  
 五十哩向毎年擴張の計劃あり現今は三臺の  
 機關車に依り運搬されつゝあり尙此外三四  
 紹介に價するものなきにあらざれども歌  
 を恐れ次に市の風俗氣候に渡りて以て稿を  
 終らんとす

市の人口は五萬弱を有す而して此地は元北  
 海道へ對する貿易港として成立せし所なる  
 を以て市民に在來の人少なく多くは他地方  
 の喰詰物若しくは一時腰折の野心家大部  
 を占め随つて人情稍もすれば輕薄其商業振  
 に見るも所謂通り一遍式の營業にして尙客  
 對する應對の拙劣なる吾人局外者をして  
 さへ尙屢冷汗を催さしむ内尤も滑稽なるは  
 二月下旬より天津して北海道各漁場へ出稼  
 する萬餘の漁夫に對する營業振りにして古  
 來よりの慣習とは云へ商人の是に對する應  
 接の傲慢なる全く主客轉倒の奇觀を呈す一  
 方彼等漁夫は又易々として彼商人輩の云ふ  
 が儘に任して敢て意に介せざる其コントラ  
 スト實に妙なり又商賈と共に市紹介の地位  
 にある各旅舎に於ても又是例に洩れず何處  
 迄も通り一遍式の發現なり吾人は準市民と  
 して正に五星霜の長日月を送迎したる内に  
 洩意ある敦厚の人情に接したる記憶を追想  
 し能わざるを悲しむものなり是れ前述の通  
 りなる人物の集合地としては蓋し已むを得  
 ざる趨勢ならん勿論中には善良の人物少な  
 からざるも所謂小提の盜外に對する如く四  
 圍の大勢には抗し難く不識の間に同化し去  
 るるなり風俗の輕薄に驚きたる吾人は實

に誘惑物の多きに一層の警戒を加へざるべ  
 からず新來の他郷人は先づ第一に各街に  
 殆んど全一の体裁を以て營業せらるる蕎麥  
 屋汁粉屋の數多なるに奇異の思をなす是れ  
 即ち吾人の云ふ誘惑物にして春宵夏夕紅粉  
 を粧いたる魔物の屢出没するを見る我等も  
 又赴任の當初小林區奉職諸君の行を送らん  
 として無意識に此旗亭に惜別の宴を張りし  
 時數刻の待ホケを食ひ辛ふじて怪氣なる  
 筑蕎麥を見舞はれたる失敗を有す即ち蕎麥  
 は表看板なり裏面は諸兄の想像に任す尙ほ  
 一つ忘る可からざるは物價の高き事にして  
 加ふるに柳原式の掛値を吹きかくる悪風  
 り者の言葉訛及服裝に於て同一物品は數種  
 の値段を附して怪ます故に新來の人はよく  
 注意して三割位は掛引して購求するを  
 要す斯く觀下し來れば青森市は遂に吾人の  
 希望と一致する一点だも發見し能はざる如  
 く思慮せらるるも古諺に云ふ住めば都の例  
 もあり即ち我等が郷里木曾の山奥も又多少  
 都人のハートに或印象を與ふるも聞くが如  
 く相當の愛着心を有するは蓋し人情當然の事  
 ならん氣候に移りて冬季は木曾地方よりも  
 數等寒威酷烈にして殊に其積雪量の多きに  
 依つて名高し即ち十一月下旬より翌年三月  
 中旬迄の間を積雪期となし就中二月初旬  
 降雪尤も多く連續して天日を拜せざる事旬  
 日の長きに及ぶ事あり且此季には冬季  
 の常風たる西北風に吹雪を現し濛々として  
 咫尺を辨せざる事往々あり市内の往來さへ  
 降雪毎に次第に高さを増し二月中旬には正  
 に六尺の高所に運ばる故に用辨の爲め其家  
 に入らんとせば先づ五六の雪の階段を降ら  
 ざるべからず青森ならては見られぬ奇觀な  
 り而して此状態を持續して三月下旬に至り

文苑

三旬の暑中休暇を如何に  
して過すべきか  
竹軒生

學生の安息日長期の暑中休暇は今や眼前に

展開せられたり親愛なる諸君は茲數日なら  
 ずして夫々家郷に歸省し懐しき父母の膝下  
 に侍し弟妹と睦び舊知を訪ひ暫くは甘き歡  
 樂に酔はんとす是亦可なり然れども暑中休  
 暇の意義を知り得ぬ休暇中の計畫を立て置  
 くにあらずれば或は無節操に陥り或は無意  
 義に日を銷し休暇終るの日に於て往事を回  
 想する時後悔徒らに膝を噛み若しくは茫と  
 して唯一場の夢の如きを覺えんかくては誠  
 に口惜しき事ならず故に先づ暑中休暇の  
 意義を知り得ぬ計畫を立てよと云ふなり  
 暑中休暇は安息日なり同時に學問修養の  
 好時機なり暑中休暇は徒らに安息を與ふる  
 が爲に設けられたるには非ず一は此期に於  
 て心身を修養し時に復し時に習ひ意氣を活  
 潑にし体力を旺盛ならしめんが爲なるを忘  
 るべからず徒らに暑しと云ふを止めよ我國  
 は臺灣を除きては温帯乃至寒帯圈内に於  
 るは堪へ得られぬ程の暑さは無き筈なり彼  
 の勞働者を見よ終日熱光を浴び砂塵に塗  
 りても意とせざるなり屋内に安居して尙且暑  
 熱を訴ふるが如きは贅澤なり須らく身を勞  
 働者の境界に置きて一考すべし古人曰く心  
 頭を滅却すれば火も亦涼しと暑さも氣の持  
 ち様によりては左程に感せぬものなり況や  
 一日中曉風月露涼味自ら掬すべき時あるを  
 や是れ學問修養の好機ならずや余は敢て學  
 問修養と云ふ只書を讀めとは云はす諸君が  
 學校を離れて郷里の人となる時學校に於て  
 修得せし所は智徳に論なく應用實行すべき  
 は勿論なり殊に久しく父母の膝下を離れ會  
 々歸りて歡を奉ずる學生にありては先づ第  
 一に父母に奉養を盡すべし兄弟姉妹を助け  
 を撫し家事を手傳ふ事を厭ふべからず斯く  
 してこそ始めて平生温清定省を缺きし罪も  
 贖ふべけれ世間の學生動もすれば浮華輕佻

に走り會々歸省するも己は賓客然として一  
 室に安臥し小説に耽り雜談を事とし甚しき  
 は父母を僕隸視し家事を抛擲して毫も心  
 關せざるものあり此の如き輩は其學ぶ所果  
 して何事ぞ又近來の學生は暑中休暇と云へ  
 ば必旅行を企て或は海水に或は温泉に行  
 べきものゝ如く考へ之を爲さざるを以て恥  
 辱とする者さへあり之亦彼の避暑遊樂を一  
 の生命と心得る婦女子の虛榮と一般なり旅  
 行の智見を擴め身心を鍛錬し浩々の英氣を  
 養ふに大効あるは今更云ふを要せず殊に登  
 山の如きは情弱安逸の弊風を打破し實質剛  
 健の氣風を養成するに於て最も有効なり余  
 も亦學生諸君が盛に登山を試みん事を希望  
 すされば旅行登山必しも多大の時間と經費  
 とを費して遠きに至るの要なし天下何の處  
 にか山川なからんや一日の清遊半日の攀登  
 青山に嘯き溪流に掬ふ亦以て平日の鬱抑を  
 發するに足れり要は一家經濟の如何を考慮  
 すべきのみ

既に暑中休暇の意義を知らば日課を立てて  
 之を遵守すべし朝は思考推理に適し夕は誦  
 讀に宜し日中讀書に懶くば字を習ひ圖を製  
 す大に妙なり概して云へば夏は推理の時に  
 ならず寧ろ想像の時なるべく歴史文學の講  
 究尤も可なり歴史の如きは國家治亂の因  
 來る所を詳にし聖賢偉人の聖賢偉人たる所  
 以を知るべく取て以て自己修養の資とすべ  
 きもの多くあらん彼の情弱卑陋の小説を讀  
 むに優ること萬々なりかくて日々を経験を  
 日誌に記すべし日誌は後日の紀念となり反  
 省修養の材料となると共に作文力を養成す  
 る効あり此の如くして三旬を纏らば必ず得  
 る所少々にはあらじ諸君暑中休暇の劈頭に  
 立ちて先づ思を茲に致せ

◎電報文は如何に文字を簡明にせざる可か  
 らずとは云へ長上に對して下に物云ふ如き  
 は無禮なり例へば長上の人に「スグコイ」の  
 如き又敬語のみ使ふて冗長に失すは電報文  
 の能事にあらず即ち「オイデヲオマチマツ  
 シテヲリマス」の如き冗に過ぎたるものに  
 してよろしく「オイデヲマツ」なる可し即ち  
 は相當の敬意を以つて簡にするにあり世少

朝寝の人に寄す

海波

偶感

大公

年氣鋭の人に兎角長上に敬意を失して悪感情を抱かしむるものあり何事もすべて世の中は電報文の長上に對する如くの中庸を取るのが肝心なり飲食の如きに於ても又然り即飽食せし時の如き何もなす能はず又少食の如きは精力衰へて之れ又事をなす能はず。噫！人生中庸なる哉而他皆斯の如し。

○「蝸牛の歩み」急いで事は仕損じるとは陳腐な言なれど一の真理を含む世少年氣鋭の人性急なるため事に往々失配するを見る大に注意すべきなり

彼の牛董が引力の法則を發見したる時は二十一才の時なり然れども當時地球の周圍に關する測度に誤りありしため十分のうちに發表する能はざりしかば之の法則を世にりきと云ふ

之に鑑みても人眞理に進まんに蝸牛の歩をなす可きなり急いで事は仕損じるのである

小松教諭が此たび熊本縣立球磨農業學校へ榮轉せられければ御別によみ送る

安井 正夫

きみがゆくあうのとはやまとほければことになかかれのをしくもあるかな  
たづねゆきひこのくまがはくみかはしかたりあふひのあらはこゝろあらめ

通信

朝鮮より

本多 清右工門

久々紙上並に校友諸氏には御無沙汰歎し居りました長々青森に居りました所今度轉勤

致しました朝鮮總督府農工部農林課の方勤務致すことになりました今後とも何分宜しく御願ひいたします實は諸君に御多忙の爲め其の意を得ず此に紙面の一角を拜借した次第です何卒不惡生は四月二十九日青森を出發し郷里は五月八日出發しました京城に在る一ヶ月もなりましたから少しも様子は解りません從つて諸君に詳細の様子を御知らせすることは乍遺憾出來ませぬ是れから追々と御知らせ致すとして初めに鮮土を踏んだ時の感想を一寸述べて見ませう

1、全山之れ禿山  
上陸するや否や驚いたのは全山之れ禿山一木を見ず更に憐憫其の荒廢も荒廢其極に達し内地にて豫想以上の荒涼なる景でありました一日も早く山を青くしなければならぬと思ひました

2、河川に水なく且つ河床高し  
釜山より京城に至る車中多くの河川を見ました一として水量の豊富なるものなく殆ど水量涸れ殊に河床高き甚しきは耕地より高きものあるを見ました又或所には山と山との間は之れ皆河川と變じ砂礫の爲めに覆はれて居る所を見ました皆之れ山林の荒廢の爲めでありました一日も早く水源涵養の完備を希望するのであります

3、都會は凡て山麓にあり(村落も同じ)  
凡て朝鮮の都會及村落は山麓に開けて居る様に見ました之れ洪水の關係であると思ふ即ち山は荒廢に荒廢を來して居るから一度豪雨が在ると忽ち大汎濫を來して爲めに都會は押流され今迄繁華な地も一朝にして荒涼慘憺たる地と化して終ふからである故朝鮮の都會は發達か遅々として進まない之れ内地と大に異なる点と思ふ(内地には河川沿岸に又は平野に都會又は村落發達)樹木は幼稚なり

車中稀に青山を見ましたけれども皆椎樹で伸長五六尺位のものでした即ち第一期の林相は遊氏の亂伐に亂伐を重ねられ今や第二期の林相を形成しつつ居るのである樹種は凡て赤松で有稀に老木も見ましたが僅少又行道樹としての老松も處々見ました以下雜觀を述べて見ませう

1、朝鮮人の家屋  
凡て家は土臺なしで丸太を土の中に打込み繩を以て巻き付け家屋は殆ど草葺きで且つ其の葺き方はアヅマヤ的と云へば一寸風雅の様には思はるゝが至つて御話にならない悪く云へば肥料小屋か豚小屋的である朝鮮の市街と云へば之れが澤山列んで居るのであるから驚かざるを得ない夫れも田舎の町なら仕方ないが朝鮮の都の京城に於て然りたら尙更驚く稀に瓦葺も見ることが話にならりません一國の興廢は其の國の市都を見よと云ふが實に然であると思ふ今や全道に跨り營々之れが改良に盡して居るから近き將來に於ては多少見る可きの觀を呈するであらませう

2、鮮人は白布を好む  
鮮人の衣服は凡て白布を用ひて居る丁度遠くから見ると白狼でも歩み居る様の感が致します一般に風雅である遊民の待徴を發揮して居る一般に進取の氣象に乏しい様だ食つては寝寝寝ねては起き起きては食ふと云ふ方だ亡國の民誠に慘むべし

3、朝鮮特有の温突(オンドル)  
温突に付ては深く調べて見ないが鮮人の家は温突を以て形成せられてある鮮人は布圍

なして温突の上に寝るのだうだ衛生上如朝鮮の首都たる京城に至れば尙更此感を深何は知らないが兎に角寒中は大分温かいからだ或人は之れに限ると云ふて居る何れ又温大に付ては項を改めて御話致しませう此外風俗人情等其の他万般に付きて目新しきことも多々ありますが追々后から申上ぐることに致しまして今度之れにて失禮いたしました。今後何分宜敷く御願致します失敬

追記  
四月廿八日母校出身者岡戸廣治君、大熊俊彦君、西野入徳君、樋口勇君と小生と五人大熊君の宅に集り集り集り集り互に充分の歡樂を盡して散會しました異郷にありての第一回の集り如何に樂しかりしよ!!

朝鮮より

西野 入徳

拜啓新緑満る美林中心も清く澄みわたる木曾の清流河畔にコックとして御研學遊ばす諸賢の御幸福を賀上候小生事久しくも住み馴れ候母校の地をば諸賢の旅行不在中突然引き放され遠く滿州の境に送り出され何となく物足らぬ心地せられ申候

吾の眼 映じたる朝鮮の片々少しばかり申上候若 諸賢にして参考にも相成り候はば望外の幸に候

旭日東天に漲る頃日本海を静に進みて釜山灣頭の絶影島に迎へらるゝ折曉風快く肌を見舞ふ甲板に佇立せる吾人の眼を最も鋭く引く物は朝鮮の山の荒れ果てて青きものとては至つて少くたゞ徒に赭褐色を呈せる山骨悉く露れて無残と不快を覺ゆる事に候山高きを以て貴からず樹あるを以て貴しとなすてふ教に此國に起らざりしかあゝ其山荒れて其國滅ぶるかと思はず朝鮮の爲め心痛み申候

雑報

學校記事  
◎校友會例會 六月十五日午後〇時四十分より本年度第三回校友會を開く辯士及び演題左の如し  
開會の辭發明の順序 坂田 部長  
艱難は良師 佐藤 光造君  
何事を成すにも其前に 種倉 隨道君  
當て必ず善惡を考へよ 二 木 君  
熱情を抑制すべし 土屋 弘平君  
死 塚田 大君  
旅行談 中村 五郎君  
悲觀と樂觀 深見 利一君  
偶感の一節スト 松澤 敏男君  
ライキ可否 熊合 雅美君  
實業家 柳澤 義雄君  
世に處する道 黒崎 洋治君  
勞働と成功 長崎 千一君  
將來に來るべき一憂 筑竹 武次郎君  
さあ何でも來い 鈴木 福重君  
南日本と北日本 就職問題 細江 七兵衛君  
木曾山の事業 大を望んで 須く小につけ 今井 眞次君  
大佛主義 齋藤 海三君  
旅の趣味 市川 豊二君  
修養に就て 新家 先生  
正道を踏め 七宮 先生  
四時半頃散會す盛會なりし

◎山崎農林校長來校 六月十八日愛知縣立安城農林學校校長山崎氏教育視察の途次福島に立寄られ午後來校生徒一同に別項の如き講話ありたり

◎擊劍部 六月廿九日午後一時より本部第一回大會を開き申候前日より掲示された大會の呼聲に操場は俄に竹刀の響を増し劍士の意氣天を衝く有様にて候ひしが當日

は型の如く始式舉行中村氏審判の下に龍攘虎搏の活劇を演じ近來稀なる壯觀を呈し申候其組割及勝負次の如し

Table with names and symbols (circles) representing participants or results in a tournament. Includes names like 唐澤(俊), 小坂(口), 油谷(力), etc.

古つものは云ふに及ばず若殿原の武者振も中々見逃すべからざる者有之若し夫れ三人抜に至りては一騎當千の士各秘術を盡し一虚一實一進一退観者をして思はず妙を叫ばしめぬかく夕陽城山に暮く頃試合を終り慰勞の爲茶菓を喫し談笑の裡に散會致申候

治四十年當校に職を奉せられ自來今日に至る迄忠實熱誠を以て吾等を指導せられ深く吾等の愛慕する所なりしが茲に先生を送らざる可らざる事となりぬ仍て式後直に校友會にて送別會を唱催し席上數氏の送詞演説安井書記の送別の歌、朗吟等あり尚校友會よりは紀念として置時計壹個を目錄として進呈し終に小松先生の謝辭ありて會を閉ぢぬ

福島の近況少々御通信申上候此頃は梅雨の候濕り勝ちなるが常にて候へど今月の福島は毎日の天氣續きにて至極結構に候然し不景氣はごまでも不景氣白米一升貳拾八錢五厘生活難を訴へるものもばつゝ有之由に候

希望と平和に満たされたる察より申上候山愈々青く水益々白き七月はいつしか來り候は皆夏衣に變り四圍のもの皆活々として笑み察の健兒も亦意氣旺盛に暮し居り候連年涙脆き天も今年は遂に泣かず梅雨とは名のみ折々夕立あるのみ連日の快晴かて加へて例の馬車福島の色彩盡く活氣を呈し候、見世物の呼聲樂隊の遠音は寮の窓を襲ひ氣も浮立申候

寄宿舍通信 希望と平和に満たされたる察より申上候山愈々青く水益々白き七月はいつしか來り候は皆夏衣に變り四圍のもの皆活々として笑み察の健兒も亦意氣旺盛に暮し居り候連年涙脆き天も今年は遂に泣かず梅雨とは名のみ折々夕立あるのみ連日の快晴かて加へて例の馬車福島の色彩盡く活氣を呈し候、見世物の呼聲樂隊の遠音は寮の窓を襲ひ氣も浮立申候

ふる盛會を極めし由に候、餘は次號に申上べく候
會費領收報告
中田 辰雄君
江畑先生 紀念品寄附金領收報告(七月十日マデ)

中にて大間々驛迄は既に開通し之より花輪村に至る間建築列車を通じ屋れり午前十時二十二分岩宿驛を發し去る十七日通過せし桐生足利等の諸驛を経て小山に達し此處にて乗換をなし喜久に至る間櫻橋の矮林作業せる所多し赤松林も又處處に見受られたり當驛より大宮に至る間には平坦なる土地に赤松林多し之れより赤羽に至る沿道には櫻橋の矮林作業せる處又田畑の間に杉林の存する處も多し進みて河口村附近に至れば田畦にはんのきを植付し所あるを見る之れ稻麥を刈り取りし際之れを乾かす爲の欄に利用するといふ午後三時半上野驛着し直に神田區連雀町旭樓旅館に投宿す

樹林をなせど煙害の爲めに枯損する物多く慘狀を呈するを見る博物館には像器物標本圖書武具等あり活けるが如き麒麟の刺製三千年の昔と語る木乃伊等珍しきもの甚だ多し天皇の御料たりし御車は木材用途の貴重なる物なるべし次で皇太子殿下御結婚紀念たる表慶館を一覽しこれより自由行動を許可せらるる夜は十一時迄外出ありたり

四十五年度二學年生
旅行日誌(續)
五月廿日 月曜日 晴天
自花輪村至東京

午前六時上野國勢多郡花輪村今井旅館を出發し東京に向ふ徒歩すること四里にして岩宿驛に達す途中森林の状態を見るに主として潤葉樹多く又所々に杉植林せるものあり尙岩宿附近には櫻橋の矮林作業せる所多し桐生より起尾に通ずる私設鐵道は目下工事

午前八時農科大學を視察すべく青山山行電車にて向ふ夜來の雨に道は泥濘して歩行困難を極むやがて正門に至る門を潜りたり道の兩側には内外各種の樹種植えられたりいざや五十町歩の廣きスペースを建物と亭々たる舊木との占むる光景を見んが案内に依りて先づ列品室を見る中にも面白く感じたるは明治三拾八年臺灣にて發見せられたる護謨邦名を亂藤と云ひるすとは著名なりがんじき皮にして水に浸すときは容易に切るを得故に筏乗り等の笠紐に用ひらるると云ふ臺灣の木瓜は梨瓜大にして白色砂糖漬等として内地などに輸るまで美味ならざるよし臺灣産琉球産の樹葉樹種の大なるには一驚を喫し美麗なる加工材の標本經木細工の列品また目を驚かす

